

国立大学図書館協議会

図書館情報システム特別委員会

目録業務システム専門委員会

最終報告

平成8年7月

(要約)

本報告では、平成6年度に実施した「目録データ作成に関するアンケート」の集計結果および意見に基づき、「遡及入力」、「中国語資料の入力」、「目録システム地域講習会」の3事項について、入力側の立場から目録データの品質向上をめざして検討を行ったものである。

(1) 遡及入力の促進について

遡及入力は各大学の責任において実施されるものであり、半数以上の図書館（室）で実施又は計画されている。

とりわけ開架図書の遡及入力については、和図書であれば9割近く、英語の資料でも8割近くが、所蔵レコードを追加するだけで所期の目的が達成できるほど、書誌レコードのデータベース化が進んでいる。

したがって、各大学の工夫により開架図書の遡及入力を促進すべきであると考えられる。

一方、研究活動に必要な図書の入力には、外国語読解能力、書誌解析能力を備えた職員の確保・養成や支援ツールとしての参照ファイルが必要と考える。また、全国的な事業として効率的に展開するためには遡及入力予算措置も別途必要と考える。

(2) 中国語資料入力について

NACSIS-CAT への目録データ入力は、それほど行われていないという現状がある。

中国語資料の入力促進のためには、必要とする文字セットを扱える端末の整備や目録基準の整備及び要員の確保・養成が必要と考える。

また、中国語資料を多量に所蔵している機関のデータを先行入力したり、参照ファイルを整備することにより、入力作業の軽減も図るべきだと考える。

(3) 目録システム地域講習会の開催について

目録システム地域講習会は平成7年度においては開催を希望した19大学が実施している。

目録データの品質維持には、講習会は必要なものであり、開催地・機関や講師の派遣など、適正かつ効率的な調整が必要である。

同時に、各大学においても学内研修やマニュアルの整備が必要である。

目 次

1. はじめに	-----	1
2. 目録業務システム専門委員会検討経緯	-----	2
3. 改善すべき事項について		
3. 1 遡及入力 of 推進について	-----	3
3. 2 中国語資料の入力について	-----	5
3. 3 目録システム地域講習会 of 開催の在り方について	-----	7
4. おわりに	-----	11
5. 参 考 資 料		
平成7年度活動概要	-----	12
委 員 名 簿	-----	13
図書館情報システム特別委員会 目録業務システム専門委員会設置要項	-----	14

1. はじめに

学術情報センターの目録システム（以下「NACSIS-CAT」という。）は、創設以来オンライン共同分担方式による目録所在情報データベース（以下「目録DB」という。）の構築が図られ、我が国の学術研究の重要な情報提供基盤となっている。

国立大学図書館は、当初から目録DB形成に参加してきたが、各大学における目録業務システムにおいてもNACSIS-CATは重要な基盤となっている。

一方、大学図書館がこれまで経験したことがない巨大コンピュータ・システムを利用した目録業務は、システムに接続し参画するという第一段階を終え、目録データの品質向上・維持・管理を行うための制度的、実務的問題を解決していかなければならない段階に到達したといえる。

さらに、平成5年12月学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会は「大学図書館機能の強化・高度化の推進について」報告し、「大学図書館間の連携協力を推進するため、共同分担目録システムへの参加と遡及入力の実進が不可欠である」と、遡及入力の実進性を強調している。

「目録業務システム専門委員会」（以下「本専門委員会」という。）では、これらを踏まえ、平成5年度より3か年を目処として、入力側の立場から目録データの品質向上をめざし、改善すべき事項、拡充すべき機能等について検討を重ねてきた。

検討の経緯を第2項で、様々な問題のうち重点的な三事項について第3項で報告することとする。

2. 目録業務システム専門委員会検討経緯

2. 1 平成5年度

当面の事項として以下の3点について検討した。

- (1) 目録システムマニュアルの現状と体系化
不足しているマニュアル（事例集等）の整備、マニュアル作りのためのガイドラインの作成などが必要であるとして、現行のマニュアルリストの作成及び説明を付け加える作業を行った。
- (2) 書誌調整文書の調査（入力側としての目録データ品質管理）
学術情報センターの安定運用と参加館の急増の中で、最近特に際立ってきた目録データの品質の問題を入力側の立場で検討することとした。
具体的には、各委員の所属する大学においてFAXで送受した書誌調整文書の調査・分析を行い、第41回国立大学図書館協議会総会（静岡）に報告した。
- (3) 目録業務システムの現状と問題点
平成6年度の継続協議とした。

2. 2 平成6年度

継続協議題である「目録業務システムの現状と問題点」のうち重点事項として以下の3点（以下「三事項」という。）について検討することとした。

- (1) 遡及入力の問題
- (2) 中国語資料入力の問題
- (3) 目録講習会の問題

検討を進めるにあたっては、国立大学図書館協議会加盟館の図書目録データ作成の実態と問題点を把握するために、平成6年10月20日から11月18日の間、アンケートによる実態調査（以下「アンケート」という。）を実施し結果の集計を行った。

なお、集計結果は平成7年10月に国立大学図書館協議会加盟館に送付した。

さらに、学術情報センターに、本専門委員会のオブザーバーとして参加を求め、貴重な教示を受ける機会を得た。

2. 3 平成7年度

本専門委員会最終年度でありアンケートの分析結果を踏まえて「三事項」について具体的な提言を行うべく検討を行った。

その内容を最終報告としてここに作成するものである。

3. 改善すべき事項について

3. 1 遡及入力促進について

3. 1. 1 遡及入力の現状と問題点

アンケートによれば、回答のあった 275 図書館（室）中、106 図書館（室）で遡及入力を実施し、74 図書館（室）で計画中である。その実施態様は、それぞれの大学において予算、入力目標数や方法などに応じて様々である。以下に特徴的な事項について述べる。

(1) 予算措置について

特別の予算措置を講じている図書館（室）は 26 あり、そのうち 23 の図書館（室）が学内経費をもって遡及入力を実施又は計画している。他の 154 図書館（室）は、ルーティン作業に組み込む形で遡及入力を実施又は計画していることになる。

(2) 入力順位について

入力順位は、学習活動に必要でかつ利用の多い開架図書、次いで出版年の新しい資料からとなっている。

一方、特殊コレクションや郷土資料等の特色ある資料を入力対象としている図書館（室）は少ない。

(3) 目録データ入力の目録情報源について

目録データ入力は、資料現物を目録情報源とする方法が多かった。このことは、NACSIS-CAT の目録基準に照らして、新規に書誌解析を行っていることを示していると考えられる。

また、目録カードなど既存の目録情報により入力を行った場合は、必要とする目録情報が十分に得られず、品質の高い目録データの作成が困難になるケースが多くなるものと考えられる。

(4) 自動登録システムについて

自動登録システムを導入している図書館は少数であり、適用結果の意見も少なかった。

しかし、自動登録システムを新規受入図書の目録データ入力に使用し、日常業務を効率的に行うことで、遡及入力に人員を当てるという有効使用をしている大学があった。

(5) 外部委託について

外部委託（人材派遣を含む）で遡及入力を行った場合、コストに対して作成されたデータの品質に満足感をあまり得ていない。

図書館が、目録データ入力のため提供する目録情報の内容や方法などに、問

題もあるようだが、受注する業者の習熟の度合い、経験の度合いによって作成されたデータの品質にばらつきがあるという意見が多かった。

3. 1. 2 新規書誌レコード作成の現状と問題点

開架図書の遡及入力に関しては、書誌レコードの作成を伴わない場合が多い。

実際、本専門委員会委員の所属するある図書館の最近のケースでは、入力対象となった欧文の開架図書でさえ、その8割は既に書誌レコードが作成されており、所蔵レコードを登録するだけで所期の目的を達成している。

すなわち、開架図書の遡及入力に必要な書誌レコードは概ねデータベース化されているものと判断できる。

したがって、各大学における開架図書の遡及入力作業は比較的容易に達成できるものと考えられる。

一方、研究活動に必要な図書の目録データ入力は、前述の開架図書の入力と比べて新規書誌レコードを作成するケースが多く、外国語読解能力や書誌解析能力を備えた人材の確保や養成が必要となっている。

また、新規書誌レコード作成の効率を高めるため出版年の古い資料や英語以外の外国語の資料の書誌参照ファイルが必要という意見もあった。

学術情報センターの参照ファイル（US-MARC、UK-MARC、GPO-MARC）は、いずれも主として英語の資料を対象としている。

これらの参照ファイルに収録されている主要な外国語比率は、英語 65%、ドイツ語 18%、フランス語 9%、ロシア語 3.5%であり、大きく英語に偏っている。

このことは、ドイツ語やフランス語の資料の新規書誌レコード作成を困難にさせる一因となっている。

また、遡及入力の情報源として過去に作成された参照ファイルの中には、目録基準整備段階で作成されている書誌レコードが多い。

これらのデータは所在情報としての利用価値は高いが、書誌レコードは現在の目録基準による記述内容との違いが大きく、現物との同定すら難しいというケースがあり、参照ファイルとして扱えないものも少なくない。

よって、前述のように書誌参照ファイルの充実を望む意見が多く出されることになっている。

3. 1. 3 学術情報の遡及入力促進のために

本専門委員会の検討とアンケートの意見から、研究活動に必要な図書等の遡及入力促進のためには、前述の開架図書の遡及入力は、各大学の責任において完了させることを前提とし、次の3点を改善・要望事項としてあげる。

(1) 参照ファイルの充実について

学術情報センターに、非英語外国語資料参照ファイルを充実することが必要である。

(2) 大型コレクション等の遡及入力促進について

各大学は、大型コレクション、特殊コレクション、大学が刊行した資料や郷土資料など、大学が所蔵する特徴ある資料群の、遡及入力を促進する必要があると考える。

またそのために、語学力と書誌解析能力を併せもつ人材を養成する必要があると考える。

(3) 遡及入力推進予算の措置について

遡及入力は、それぞれの大学や図書館で行うものであり、予算措置も大学や図書館で行われている。今後も図書館はそれぞれの図書館の事情や大学の教育・研究環境をふまえ、遡及入力について適切な予算措置をする努力を重ねる必要がある。

一方、遡及入力を全国的な事業として効率的に展開するためには、大量に蔵書を所蔵する大学と、学術分野に特色ある蔵書を構成している大学へ、重点的に遡及入力予算が措置されることも必要と考える。

更には、いくつかの大学で試みられている文部省科学研究費による遡及入力についても、各図書館が、蔵書構成の特色を生かした申請が行えるかどうか、検討すべき課題であると考ええる。

3. 2 中国語資料の入力について

アンケートによれば、回答があった 297 図書館（室）のうち 112 の図書館（室）が中国語資料を所蔵しているが、所蔵の有無や受入数の多少により、問題認識に差異が存在している。

3. 2. 1 NACSIS-CAT への入力状況

中国語資料の NACSIS-CAT への入力は、所蔵する図書館の半数以上が「全く入力していない」という状況である。

入力しない理由は、資料が少ないという理由が最も多く、次に、目録基準が明示されていない。文字セットがない、さらに、書誌の解析が困難なため等をあげている。

3. 2. 2 目録入力基準について

「入力しない理由」の第2位に挙げられた目録入力基準は、回答館（室）のほとんどがその必要性を挙げているが、明文化された基準は一部の大学を除いて有していない。

一方では、中国語資料を中心にして蔵書を構成する特殊な機関は、その機関独自の方式で整理が進んでいる現状もあり、専門家集団による早急な検討とその結果の提示が必要であると考えます。

学術情報センターの総合目録小委員会の下に、「中国語資料データベース化検討ワーキンググループ」が平成7年度に設置され検討が進められている。アンケートの意見や検討内容が可能なかぎりその中に反映されることを期待するものである。

3. 2. 3 文字セットについて

NACSIS-CATの文字セットでは、現在の中華人民共和国（以下中国）で使われている簡体字は外字としてしか扱えず、そのままの形では入力も表示もできないことが最も大きな問題である。

新NACSIS-CAT以降の開発では、国際規格である「ISO/IEC 10646-1-1993」を翻訳し、変更することなく作成した日本工業規格「JIS X0221-1995」（以下「X0221」という。）を採用することを決定している。

この文字セットは、簡体字を含め、漢字を20,902字収録しており、現在の文字セットの問題に一定の解決をみることが期待される。しかし、これまでに比べ、文字を厳密に使いわけることができるため、より正確な書誌登録が可能となる反面、新たな問題として、日本の漢字と異なる中国漢字の知識や解析能力が求められることになる。

さらに、目録業務用端末で、これらの文字セットが自由に簡便な操作で入力できることが前提となる。

3. 2. 4 参照MARCについて

「X0221」が導入されれば、次の段階として中国語資料に関するMARCの導入が検討されるべきであると考えます。

現在のNACSIS-CATにおいて、US-MARCをはじめとする各種の参照MARCが果たしている役割の大きさを考えれば、中国MARCの導入によって、均質な書誌を利用することができ、入力が大いに促進されることが期待できる。

中国および台湾のMARCについては、新NACSIS-CATの参照ファイルとしての導入の可否を先の「中国語資料データベース化検討ワーキンググループ」で検討され

ることを期待する。

なお、これらの MARC は、主に新刊の図書（新学書）が対象となっていると考えられるので、いわゆる「漢籍」については、大量所蔵機関に資料を先行して入力するか、あるいはそのような機関ですでにデータベース化しているデータを、参照ファイルとして利用することも、併せて検討することを要望する。

3. 2. 5 教育・研修について

中国語資料は外国語資料として扱うべきであると考えられる。さらに、目録データ入力に際しては発音表記（ピンイン等）の付与など、ヨーロッパ系言語にはない特殊な扱いも必要である。このため、中国語資料を入力する要員を養成するにあたって、入力するデータの記述を統一するために、教育・研修が必要である。

3. 2. 6 中国語資料の入力促進のために

本専門委員会の検討とアンケートの意見から、中国語資料の入力促進のために学術情報センターに対し次の4点を検討することを要望する。

(1) 目録情報の基準の策定について

新学書・漢籍の目録規則と入力基準を策定する必要がある。

(2) 文字セットについて

目録業務用端末及び検索用端末で、「X0221」の文字セットが利用できるよう、各メーカーに対して情報の提供を行う必要がある。

また、既存のワークステーションやパーソナルコンピュータでの対応策についても、同様に情報の提供を行うことも必要である。

(3) 中国 MARC の導入について

中国 MARC を新 NACSIS-CAT の参照ファイルとして導入するための検討を行うことが必要である。

(4) 中国語資料の研修について

入力基準確定後、中国語資料の入力のための研修を、現在の研修カリキュラムの中に加えることが必要である。

3. 3 目録システム地域講習会の開催の在り方について

3. 3. 1 目録システム地域講習会の現状と問題点

アンケートの結果から、下記のような種々の実態・問題点を指摘することができる。

(1) 開催機関及び開催地域について

NACSIS-CAT 参加機関は、すでに私立大学が国立大学の2倍を上回り、私立大学から目録システム地域講習会（以下「地域講習会」という。）への受講者も年々増加している。

平成7年度地域講習会にあつては、地域講習会の開催を希望した19大学のうち、私立大学は1校（受講者10名）で、全受講者（250名）に対して4%である。

また、NACSIS-CAT 参加機関数の地域格差によって受講希望者と開催機関の数にばらつきがある。

平成7年度の地方別開催機関数及び受講者数は、北海道1校（24名）、東北1校（14名）、関東4校（45名）、中部3校（31名）、関西4校（67名）、中国2校（32名）、九州4校（46名）であり、結果として西日本に偏る結果になっている。

（2）開催機関の施設、設備及び運営について

開催機関には、講習会専用の施設はなく、開催ごとに会場の設営をしている例が多く見られる。

地域講習会用の端末は学内措置を行ったり、日常業務用の端末を転用するなどして8学部以上の大学が平均14台、2～7学部の大学では平均7台を使用している。

したがって、各開催機関では、日常業務への影響が発生するが、これらの影響を最小限にとどめる工夫を行いながら実施している。

（3）講師有資格者について

地域講習会の講師団は、学術情報センターからの講師と大学に所属する講師有資格者によって構成されている。

講師有資格者の数は大学規模によってかなりのばらつきがあり、特に2～4学部の大学では有資格者が少なく（平均1.3名/大学）、単独で地域講習会を開催するための要員確保が十分にできない状態にある。

また、実習で大きな役割を果たす講師補助者も講師有資格者であることが望ましいが、8学部以上の大学（平均6.7名/大学）であっても、1機関で十分な講師有資格者を確保することが困難である。

さらに、NACSIS-CAT は、コーディングマニュアルの項目追加、目録基準適応範囲の明示など年を経るごとに発展をとげ続けており、目録業務に従事していない場合、講習会前に、これらの進展を理解する作業が別途必要となる。実際、5学部以上の大学では、講師有資格者の6割が現在目録業務に従事していないという状況がある。

一方では、地域講習会を開催する機会が稀な単科大学には、総数で35名もの講師有資格者が所属している。

講師確保のため、実務的な調整を計り、近隣大学の講師有資格者を活用する方法も考えられる。

(4) 受講者について

NACSIS-CAT 参加機関が増加するにつれ、受講者の基礎知識や目録システムへの習熟度も開きが大きくなりつつある。

従来のように同一の課題、カリキュラムで初心者と初級以上の者を同時に教えるシステムを見直し、たとえば、中級者レベルとして、解決困難な事例検討を中心としたカリキュラムなど、クラス別レベル別講習会を開催することが必要と考える。

また、開催機関と受講者所属大学の導入機種の違いからくる端末操作の違いや、各大学図書館が導入した図書館業務システム（以下「ローカルシステム」という。）の構造上の違いが地域講習会の実習効率を阻害している点がある。さらには、学術情報センターにおいても、新旧 NACSIS-CAT の混在や、参加機関が導入する機種・ローカルシステムはますます多様化してくると予想され、対処が必要と考える。

3. 3. 2 学内研修・ローカルシステムマニュアルの現状と問題点

目録業務を円滑に遂行するには、地域講習会受講前及び受講後の継続的な学内研修がますます必要となってくる。

しかし、現状においては目録規則やローカルシステムについての研修体制・マニュアルは不備であると言わざるを得ない。

98 大学のうち半数以上の大学は、目録規則研修を必要としているが、実施している大学は 2 割にも満たない。

ローカルシステム研修に関しても必要性は認めているが、2 割の大学が実施しているにすぎない。

目録規則に関するマニュアルは、7 割弱の大学が必要としているが、整備している大学は全体の 2 割である。

ローカルシステム操作マニュアルは、8 学部以上の大学では 7 割以上が作成しているが、7 学部以下の大学では、整備状況は 4 割に満たないという状況である。

学内研修の実施や学内業務マニュアルの整備は、業務の効率化、目録データの品質維持・向上のために各大学での積極的な取り組みが必要と考える。

とりわけ、地域講習会講師と同様に大学間における調整を行い、同一地区内での目録規則に精通した職員の派遣を望む意見もあった。

3. 3. 3 地域講習会の効果的開催のために

本専門委員会の検討とアンケート調査の結果から、地域講習会の効果的開催のために次の5点を改善・要望事項として掲げる。

(1) 地域講習会の開催機関及び開催地域について

学術情報センターは、NACSIS-CAT 参加機関数と交通の利便を考慮し、全国を適切な規模のブロックに分割したりするなど、地域講習会の開催数を増加する方向で調整をはかる必要があると考える。

また、私立大学はその設立母体が異なるので、開催が難しいと思われるが、講習会開催を促進するための方策を検討する必要もあると考える。

(2) 講師団の組織及び派遣について

学術情報センター及び図書館は講師養成・再養成を行うとともに講師有資格者のブロック別の講師団を組織し、地域講習会へ講師及び講師補助者を派遣することも必要であると考ええる。

また、派遣する講師数は受講者数に応じた規模にする必要があると考える。

(3) 学内研修体制の整備について

学内の研修体制・マニュアルを同一ブロック、同一機種間で調整整備し、目録システム講習会受講予定者は極力、事前に学内で研修を終了することが望ましい。

また、目録規則を実務において適応させる能力や書誌調整能力をもつ人材を図書館は養成する必要があると考える。

(4) 実習用目録端末機について

地域講習会用の実習用目録端末機は、開催機関で措置するのが困難な場合もあるので、学術情報センターで措置することも必要と考える。

(5) システム研修用ソフトについて

NACSIS-CAT 参加機関が増加し、使用環境の異なるシステムが混在することから、学内研修・自己学習のためのビデオテープ又はCAIソフト等による研修システムを開発・作成することも必要と考える。

4. おわりに

本専門委員会の最終報告をまとめるにあたって、各委員は項目の原案作成を分担し、次回委員会までは京都大学附属図書館のFTPサーバを介して提示された原案についての意見の交換を行った。

いわば、NACSIS-CATと同様に共同分担方式による報告書の構築を行ってきた。

また、意見の集約を行うにつれて、学術情報センターへの期待や要望は大きいものとなり、あらためて、大学図書館の目録業務は文字通りNACSIS-CATを中心とした共同分担作業で動いていることを実感させられることになった。

これらの要望のうち、既に学術情報センターによりコーディングアニュアルのオンライン化、地域講習会講師の派遣旅費の学術情報センター負担、中国語資料データベース化検討ワーキンググループの設置や目録講習会カリキュラムの見直しなどが行われいくつかの問題が解決されている。

しかし、所蔵データ2000万件は全大学図書館の蔵書数のわずか10%に過ぎず、いまだ入力されていない膨大な蔵書を目録DBとして構築していくためには、制度的な整備を期待するだけでなく、各大学がさらなる工夫や大学間の協力をさらに強め、入力環境の整備と要員の養成について不断の努力をすることがなによりも必要であると考え。

すなわち、国内の学術情報の整備と流通において大学図書館に求められている重要な役割を果たすべく、目録業務においても点検と評価に基づく改善が必要であると考え。

本専門委員会報告書及びアンケート集計が、各大学における業務点検やこの全国規模の分担協力システムをなお一層発展的なものとするための参考となることを期するものである。

なお、最終報告書作製にあたっては、アンケート調査にご協力いただいた国立大学図書館協議会加盟館及び本専門委員会にオブザーバとして出席していただき貴重な情報とご意見をいただいた学術情報センターの関係者各位に厚くお礼を申し上げます次第である。

平成8年6月

国立大学図書館協議会
図書館情報システム特別委員会
目録業務システム専門委員会

平成7年度活動概要

- 第1回会合** 平成7年9月5日（火）
1. 本専門委員会で検討すべき事項、範囲等について協議した。
 2. 委員を目録講習会・研修、遡及入力及び中国語資料に分け、各委員で問題の整理を行うこととした。
 3. 目録データ作成に関するアンケート集計結果について協議した。
- 第2回会合** 平成7年10月16日（月）
1. 学術情報センターより「多言語対応目録システム」などについて説明をうけ、アンケート集計結果をもとに意見の交換を行った。
 2. 目録データ作成に関するアンケート集計結果を全加盟館及び学術情報センターに送付することとした。
- 第3回会合** 平成7年12月12日（火）
1. 各委員が分担した最終報告書素案について協議し、再度検討することとした。
 2. 分担した報告書案の意見の集約はFTPサーバを利用することとした。
- 第4回会合** 平成8年2月20日（火）
- 最終報告書案について協議し、字句を修正し本委員会最終報告とした。

委員名簿

	滋賀医科大学	小川晋平	教務部図書課整理係長
(主査)	京都大学	吉田哲廣	情報管理課長
	同	林茂栄	情報管理課図書館専門員
	同	木村祥子	情報管理課和書目録情報掛長
	同	山田周治	情報管理課洋書目録情報掛長 (平成7年10月から)
	同	忽那一代	情報管理課洋書目録情報掛 (平成7年9月まで)
(副主査)	大阪大学	松本連蔵	情報サービス課長
	同	山崎隆史	情報管理課洋書目録情報掛長
	神戸大学	小倉生栄	情報管理課データ管理掛長
	奈良教育大学	松尾江津子	情報サービス係長 (平成7年9月まで：目録情報係長)

図書館情報システム特別委員会
目録業務システム専門委員会設置要項

平成 5年 7月 15日
図書館情報システム特別委員会

1. 目的

図書館情報システム特別委員会に、大学図書館として目録・所在情報システムの一層の円滑な運用を図り、もって図書館業務の効率化に資することを目的として、実務担当者による目録業務システム専門委員会（以下「専門委員会」という。）を設置する。

2. 検討事項

目録・所在情報システムに係る目録業務の現状を踏まえ、以下の点から検討を行うこととする。

- (1) 現状における、問題点の集約・分析について
(入力基準、データ品質、システム等)
- (2) 解決策について
(マニュアル整備等)
- (3) 将来展望について

3. 専門委員会の構成

専門委員会は近畿地区が担当する。委員は、近畿地区の図書館情報システム特別委員館が選考する。

4. その他

専門委員会は原則として年1回検討結果をまとめ、図書館情報システム特別委員会に報告するものとする。